

# 韓国ドラマ『私の名前はキム・サムスン』の視聴経験は 何をもたらしたのか—日本女性のライフストーリーを中心に How the viewing experiences of Korean drama "My lovely Sam- soon" affect daily life: Focusing on Japanese Women's life stories

金 ミンジ◎  
Minji Kim

名古屋大学大学院国際言語文化研究科 Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University

**要旨** 本稿は、日本女性の韓国ドラマ『私の名前はキム・サムスン』の視聴経験と日常生活における実践が深く関わるものとみなし、自身の経験を語るライフストーリーを用いてその関係性を試みた。日本女性たちは個々の経験から「有職女性」であるキム・サムスンに強く共感していることが分かった。彼女たちは『キム・サムスン』を社会で制限された自身の欲求を満たすためのツールとして見ており、キム・サムスンをロールモデルとし、今後のライフストーリーにおける新たな自己を再構築している。

**キーワード** 韓国ドラマ、『私の名前はキム・サムスン』、視聴経験、ライフストーリー、日常生活

## 1. はじめに

本稿では、韓国ドラマ『私の名前はキム・サムスン』(以下、『キム・サムスン』)の日本女性における視聴経験に注目する。日本女性が『キム・サムスン』を楽しむことは何を意味しており、その視聴経験は自身の日常生活にどのような影響を及ぼしていたかをそれぞれのライフストーリーを用いて考察することである。

2005年、韓国で話題の一つとなったドラマ『キム・サムスン』は、30代手前の独身女性、キム・サムスンがシブティシエの仕事にプライドを持ち、仕事と恋愛に一生懸命に生きるストーリーである。主人公キム・サムスンは、ぼつちやりした外見、学歴、家柄など特に誇れるものはないが、歯に衣着せぬ物の言い方で正々堂々と生きることで、多くの女性視聴者に共感を得ることになり、その斬新な設定から50%を超える視聴率を記録した。このドラマは家父長的イデオロギーにおける受動的かつ従順的女性主人公とは異なる積極的で進歩的な女性像を示しており、フェミズムのドラマだと評価されている(Kim2006; Chung2007)。

2010年日本の地上波テレビで放送され、日本女性に大いに共感を持たれた<sup>1)</sup>『キム・サムスン』を彼女たちはどう見ていたのだろうか。ドラマを楽しむという行為が単なる代理満足に留まらず、自身の日常生活で女性の主体性を強調した新たな実践として表れるとすれば、新女性を表している『キム・サムスン』を楽しむ日本女性の日常生活にも何らかの変化が起き得るだろう。本稿では、日本女性の『キム・サムスン』の視聴経験は、彼女らの日常生活に何をもたらしたのかを追究する。

## 2. テレビドラマのオーディエンス研究

テレビドラマに関する研究は、大きくドラマ・テキストを中心としたイデオロギーを分析する研究と、ドラマに関する受容者の反応を分析する研究に分類できよう。ドラマ・テキストの意味はテキストに内在されるのではなく、オーディエンスとの出会いによって形成されるといった能動的オーディエンス(active audience)概念が現れた。1970年代、メディア・オーディエンス研究は量的研究方法の限界を克服するため、カルチュラルスタディーズにおけるオーディエンス研究として発展する。スチュアート・ホール(Stuart Hall,1980)は、記号化されたメッセージが必ずしも同じ意味でオーディエンスに解釈されるのではなく、オーディエンスがどんな位置にいるか、どんな社会・文化的文脈の中で存在するかを重視している。ホールによって提唱された能動的オーディエンス概念は、オーディエンスの経験を具体的に探求するエスノグラフィー研究によって定着する。Ang(1985)は、オランダ女性がなぜアメリカドラマ『ダラス(Dallas)』を視るのかを追究した。Angは、ダラスの女性視聴者の感想文を用いて、彼女たちはドラマの中に非現実的で誇張された設定が多くても、その誇張された人物間の葛藤により注目し、日常生活の中でも有り得る話として認識し共感すると述べた。Angは、ドラマが与える非現実的ファンタジーがオーディエンスの情緒に訴えられる時生まれるリアリズムである「情緒的リアリズム」をオーディエンスがドラマを楽しむ重要な理由として提案した。

フィクションのドラマからリアリティが見出され、日常生活と関係付けてみるこの概念は、本稿のオーディエンス分析において参照すべき重要な手がかりとなっている。また、Radway(1984)は、中流階層主婦は、ロマンス小説を反復的に読むことで代理満足し、家父長的社会で不足した欲求を満たしていたと主張した。Radwayは、日常生活で抑圧されていた女性たちの欲求が実現される抵抗的意味が内在された場としてロマンス小説を説明しており、この視点はフェミニズム的性向を持つ『キム・サムスン』を楽しむ日本女性の欲求を見出す本稿において、重要な示唆点を有するであろう。

近年、女性の社会進出及び社会的地位の向上によって、テレビドラマで働く女性が続々と登場している。テレビドラマに描かれる女性像の変貌に伴い、それを受容する女性オーディエンスの意味解釈を、より多様な観点から考察する必要があるだろう。日本人の有職オーディエンスが、アメリカドラマ『Sex and the City』を視聴した際の作用を分析した河津(2008)は、オーディエンスはドラマの登場人物の生き方を見て、自身の生活に「生き方のバイブル」「泣きネタ」「自分へのご褒美」など、重要な生活資源として参照していたことを示した。テレビドラマが、自分の身近にいない大都市で働くキャリア女性を登場させることで、反イデオロギー的女性像を提案する役割と女性オーディエンスの意味解釈への新たな方向性を提示したのであろう。

本稿で注目する『キム・サムスン』をめぐるオーディエンス研究も多く行われ、その大概はドラマが人気を得た理由を追究したものである(Han 2005;Yun 2006;Chung 2007)。『キム・サムスン』視聴後のオーディエンスの意味解釈を個々の経験との関係の中で考察したKim(2006)は、オーディエンスは日常生活の中で経験していることをキム・サムスンを通じて共感しており、女性の社会進出及び恋愛における主体性を現実的に認識していると説明し、韓国社会における男女役割やイデオロギーが変わりつつあることを指摘した。以上の先行研究から見ると、能動的オーディエンス概念に基づくオーディエンスのドラマ視聴は、個々の社会文化的文脈によって意味解釈が異なり、その違いは自身の日常生活と深く関わっていることが示唆される。

### 3. 分析結果と考察

本稿では、オーディエンスの『キム・サムスン』の視聴経験と、それに伴うと予想される新たな実践が個々の日常生活における経験の連続線上にあると想定しているため、自身の経験を語るライフストーリーを用いる。ここでは『キム・サムスン』のオーディエンスを対象にインタビュー調査<sup>9</sup>を行い、日本女性二人のライフストーリーを取り上げその内容を検討して行く。

#### 3-1 日本女性の『キム・サムスン』視聴経験

##### (1) 主人公キム・サムスンへの深い共感

二人の日本女性は『キム・サムスン』の主人公が再現する現実性に強く共感していた。彼女たちは誰もが経験する就職活動、仕事、恋愛、結婚などをリアルに再現している『キム・サムスン』の現実性と自身の経験が重なっていたことを強調しながら、特に「有職女性」であるキム・サムスンに強く共感していた。彼女たちはキム・サムスンの就職活動への心構え(Aさん)や仕事に対する態度(Bさん)、仕事観(Aさん・Bさん)について自分と同じ立場であると認識し、同一化していた。

A 最初彼女も無職から始まったと思うんですけど、そこが当時の私と一緒にだったので、そこは、どうなるんだろう、仕事をすぐ見つかるの良いな〜とか(笑) やっぱ手に職を持った方が良いんだろうなというふうに思いながら見ました。私もその当時(仕事を)一生懸命探してはいたんですけど、1年間という長い間ずっと仕事を探していたので、あ、いいのないな〜と諦めてたりとか、でも彼女は結構どん欲に探していたと思うので、『キム・サムスン』を視る度に自分も働くためにはああだこうだ言ったらだめだし、もっと一生懸命に探さないとかだめだな〜と思いました。

当時、仕事がなくで多くの時間を家で過ごしていたAさんは、同じく無職で職探しに一生懸命だったキム・サムスンに強く共感し、同一化している。Aさんは、仕事がなくで不安だった日ごろの苦痛が『キム・サムスン』を視ることによって和らぎ、日常生活における自身の就職活動を振り返ってみるきっかけとなっていた。

B キム・サムスンだって、あの、料理を留学して習って、それでまあ、免許があるから働けたというのもあるし、で、私も(歯科衛生士の)免許持っているんで、うん。それで、やっぱり免許持っていない人とは違うことが出来るからそれをやっぱ一所懸命しようと思いました。

歯科衛生士の資格を持って仕事をしているBさんの場合、パティシエの資格を持ってレストランで働くキム・サムスンに強く共感し、同一化している。さらに、Bさんは、仕事にプライドを持ってパティシエの資格を生かして主体的に携わっていく

キャリア女性のキム・サムスンを見ることで、自身の日常生活における社会経験を振り返って見ていた。彼女たちは、『キム・サムスン』に共感することでリアリティを感じ、自身の日常生活と照らしながら視ていたのである。

## ② 日常生活への投影

二人の日本女性はそれぞれの日常生活における経験から「働くキム・サムスン」に強く共感し、照らしながら視ることから進展し、自ら日常生活における様々な領域に『キム・サムスン』を投影して視ることで楽しんでいく。その中で、必然的にキム・サムスンと異なる経験が現れるが、彼女たちはその違いを好意的に解釈し、情緒的に共感することで、フィクションの世界のキム・サムスンをロールモデルとした新たな実践を導くための欲求を呼び起こしていた。

B 私は、ただ単に仕事をやっているだけで、与えられたことをやってただけだったけど…(キム・サムスンは)年の若いくない女の人が、一生懸命に仕事も恋愛もしていて、で、結果、うん…ボーイフレンドもできて、仕事もうまく行って…やっぱり、自分に妥協とかせず、自分に自信を持って、行動すれば、きっといいことがあったり、それにつながる仕事ができたり、良いことがあるかな～と思いました。

Bさんは、若い世代に劣るほどの希望を持って一生懸命なキム・サムスンの姿に距離感を感じてはいるものの、その姿が良い結末に結ばれるといった情緒的共感が、Ang(1985)が指摘した「情緒的リアリズム」を生産することで、自身の日常生活を省りみていた。

A (キム・サムスンの言動を)見ているとスカットしました。やっぱり、彼女ははっきりものを言うので、それ見ていると、自分はあまり言えないので、(当時の)面接官とかに代わりに言ってもらっているような、自分だったらそういうふうには言えないだろうなというのも彼女は言っていたんで…

Aさんは『キム・サムスン』の視聴経験を語る時、面接を受けていた当時の経験を思い出しながら「いま、ここ」で新たなストーリーを再構築している。勤務先の社長に、言いたいことをはっきり言う率直で堂々としているキム・サムスンは自分とは距離感がある。しかし、その距離感のあるフィクションの世界を自身の日常生活に投影することで「スカットする自分」を発見し、自分の中に形成された「情緒的リアリズム」は、自身に日常生活における社会への抵抗感や解放感を与え、代理満足させていた。

## 3-2 社会における主体的実践

上述したそれぞれの日本女性は、『キム・サムスン』を自身の経験に投影して視ることで、今後のライフストーリーに「あるべき自分」を新たに書き出して行こうとしていた。

A(仕事をしていた時は)朝起きて、仕事に行き、残業して、夜帰ってきて、ご飯食べて寝るみたいな…まあ、たまには遊びに行ったり、飲みに行ったりもしてたんですけど、それが当たり前で…例えば、変わる(派遣の継続するか否かの)時も、1か月以内には決まっていたので、長期でその時は1年も仕事がなかったんで、どうしようと思ったし、キム・サムスンを見てから前の自分を思い出して、手に職はあるべきだと思いました。あの、パティシエのキム・サムスンみたいに…だから、本当に(仕事探すことを)私も頑張りましたね。

Aさんは長期に渡って仕事がなく、不安な毎日を過ごしていたが、似たような立場で職探しに一生懸命な『キム・サムスン』の姿を見ることで励まされていた。さらに、「無職女性⇒有職女性」になるキム・サムスンを通して社会における「あるべき自分」を再構築し、それを日常生活に置き換えることで新たな生き方を今後のライフストーリーに書き出していた。

B 最初働き始めた時は、あの、(歯科衛生士の)免許持っているのに、免許持っていない人と同じことしかさせてもらえず、ちょっとは我慢したけど、『キム・サムスン』を見てからやっぱりさせてもらわないとだめだからと思って、自分でいに行きました。(勤務先の歯科の)先生に「資格を持っているので、ちゃんと資格を生かせる仕事をさせて下さい」と

言ったら、簡単に次の日からさせてもらえるようになって、そう、あ、だから、言えはいいのか!と、言わないでいたら、うん、そのままだったかなと、思います。

Bさんはこれまで職場で与えられた仕事をするに慣れていましたが、パティシエとして仕事に主体的に携わっていくキム・サムスンを見ることで、自身の働くことの意味を確かめるきっかけとなった。「歯科衛生士」の資格を持っているが、その仕事をさせてもらえなかったBさんは、職場における不当な対応に甘んじていた自分を省み、社会における自分の立場をより良くしていく主体性を見出し、新たに「言う自分」を実践した。『キム・サムスン』の視聴経験は、彼女たちの日常生活における制限されていた自身の欲求を満たし、新たな実践を導く結果となった。このことから家父長的社会への抵抗的行為として女性のロマンス小説の読書行為を解明した Radway(1984)の主張とも一脈通じる点が示された。

#### 4. 結論

本稿では、ドラマ視聴によって日常生活で表れる新たな実践を日本女性の韓国ドラマ『キム・サムスン』の視聴経験を事例に分析した。「ドラマを見る」という行為を人々の経験の一つとして見なし、それに伴われる新たな実践との関係性を追究する本稿では、その一連の経験が行なわれる個々のライフストーリーを通じて解明することを目的としている。分析結果、本稿で取り上げた二人の日本女性はそれぞれの自身の経験から『キム・サムスン』に共感することで、リアリティを感じ、自身の日常生活における新たな自己を構築していく構造が見られた。日本女性は、『キム・サムスン』の視聴経験によって日常生活で制限されていた自身の欲求を満たし、そこから生まれる抵抗感と解放感は彼女たちが『キム・サムスン』を楽しむ重要な理由となっていた。また、彼女たちは『キム・サムスン』を通じて社会における在るべき自分の地位を確立するための人生の指針として楽しんでおり、日常生活で新たな実践を行っていたことが分かった。

#### 補注

(1)『キム・サムスン』は、TSUTAYAの2006～2008年の間、最もレンタルされた韓国ドラマ1位に選ばれた。2010年、日本地上波(フジテレビ系)の「韓流α」で放送され、5%台の高視聴率を記録する。

(2)2014年11月に『キム・サムスン』を楽しんだ日本女性を対象にインタビュー調査を行った。インタビューAは、42歳で派遣社員であるが当時無職で独身、一人暮らしをしている愛知県名古屋市在住の女性である。インタビューBさんは、43歳で歯科衛生士の資格を持って個人歯科で働いており、既婚、子供なしの夫婦暮らしをしている三重県在住の女性である。

#### 参考文献

- 片桐 雅隆(2000). 『自己と「語り」の社会学—構築主義的展開』世界思想社
- 河津 孝宏(2008). 「「私」を語るテレビ視聴—海外ドラマ『Sex and the City』の生活史的实践」『マス・コミュニケーション研究』72.
- 桜井 厚(2002). 『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- フォンセカ酒井, アルベルト清(2006). 「ケン・プラマーにおけるライフストーリー調査法のメディア研究への応用可能性—初期オーディエンス・エスのグラフィーとの関連性からみた認識論的・方法論的考察」『千葉大学社会文化科学研究』12.
- Ang, Ien(1985). *Watching Dallas: Soapopera and the melodramatic imagination*. Menthuen.
- Kim, Myoung-Hye(2006). ドラマ『私の名前はキム・サムスン』に対する女性受容者の解読と日常実践に関する研究. 『言論科学研究』16(2)(韓国語)
- Chung, Young-Hee(2007). 『私の名前はキム・サムスン』に関する受容者の現実的共感と楽しみに関する研究. 『韓国言論学報』151(4)(韓国語)
- Hall, Stuart(1980). Encoding/decoding. In S. Hall, D. Hobson, A. Lowe, and P. Willis(Eds.), *Culture, media, language*. London: Hutchinson.
- Han, Gwi-eun(2006). 人気ドラマの中の中心人物の特徴と青少年の自我アイデンティティ形成との相関関係—『私の名前はキム・サムスン』を中心に. 成均館大学言論情報大学院修士論文. (韓国語)
- Radway, J (1984). *Reading the romance: Women, patriarchy, and popular literature*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Yun, Se-ra(2006). ドラマ『私の名前はキム・サムスン』の楽しみに関する研究: テキストと受容者の相互作用を中心に. 延世大学映像大学院修士論文. (韓国語)